

五十猛命の神話の意義

はじめに

村山 直子

『日本書紀』神代第八段は、本文と六つの異伝から成る。このうち本文と、第二、第三、第四の一書では、スサノヲによるヤマタノヲロチ退治の神話が語られている。このほか第一の一書では、スサノヲが出雲に降り、イナダヒメと結婚し、その子孫がオホクニヌシであることが記されており、また、第六の一書ではオホクニヌシがスクナビコナと国を作り、その後にはオホクニヌシのもとにやつて来た大三輪の神が三諸山に鎮座したことが記されている。これらはいずれも、スサノヲとその子孫にまつわる、出雲を中心とした話である。

本稿で注目したいのは、第四の一書及び第五の一書の記述である。ここではスサノヲとその子孫である五十猛命が、木の種をまいたとされる話が載録されている。

第四の一書

一書に曰はく、素戔嗚尊の所行無状し。故、諸の神、科するに千座置戸を以てし、遂に逐ふ。是の時に、素戔嗚尊、其の子五十猛神を帥めて、新羅國に降到りまして、曾戸茂梨の処に居します。乃ち輿言して曰はく、「此の地は吾居らまく欲せし」とのたまひて、遂に埴土を以て舟に作りて、乗りて東に渡りて、出雲國の簸の川上に所在る、鳥上

の峯に到る。時に彼処に人を呑む大蛇有り。素戔鳴尊、乃ち天蠶斫劍を以て、彼の大蛇を斬りたまふ。時に、蛇の尾を斬りて刃欠けぬ。即ち摩きて視せば、尾の中に一の神しき劍有り。素戔鳴尊の曰はく、「此は以て吾が私に用ゐるべからず」とのたまひて、乃ち五世の孫天之眞根神を遣して、天に上奉ぐ。此今、所謂草薙劍なり。初め五十猛神、天降ります時に、多に樹種を將ちて下る。然れども韓地に殖ゑずして、尽に持ち帰る。遂に筑紫より始めて、凡て大八洲国の内に、播殖して青山に成さずといふこと莫し。所以に、五十猛神を称けて、有功の神とす。即ち紀伊国に所坐す大神是なり。

第五の一書

一書に曰はく、素戔鳴尊の曰はく、「韓郷の嶋には、是金銀有り。若使吾が兒の所御す国に、浮宝有らずは、未だ佳からじ」とのたまひて、乃ち鬚髯を抜きて散つ。即ち杉に成る。又、胸の毛を抜き散つ。是、檜に成る。尻の毛は、是被に成る。眉の毛は是櫛樟に成る。已にして其の用ゐるべきものを定む。乃ち稱して曰はく、「杉及び櫛樟、此の兩の樹は、以て浮宝とすべし。檜は以て瑞宮を為る材にすべし。被は以て頭見着生の奥津棄戸に將ち臥さむ具にすべし。夫の噉ふべき八十木種、皆能く播し生う」とのたまふ。時に、素戔鳴尊の子を、号けて五十猛命と曰す。妹大屋津姫命。次に楓津姫命。凡て此の三の神、亦能く木種を分布す。即ち紀伊国に渡し奉る。然して後に、素戔鳴尊、熊成峯に居しまして、遂に根国に入りましき。棄戸、此をば須多杯と云ふ。被、此をば磨紀と云ふ。

このように、第四の一書において、高天原を追放されたスサノヲは、五十猛神を連れて新羅に降つた後、埴土で舟を作つて出雲国の島上の地に到り、ヤマタノヲロチを退治したことになつてゐる。第五の一書には出雲を舞台とした話はないが、スサノヲが身体の毛を抜いて、船や宮殿などを造るのに適した木々を生み出したとされ、また子の五十猛命や大屋津姫、楓津姫がよく木種を播いたとされる。五十猛命は、『古事記』におけるオホヤビコ同一神とも言われるが、『古事記』にはオホヤビコが木種をまいたとする話はない。本稿では、『日本書紀』に記載されている五十猛命の話がどのような意味を持つてゐるのか、また第四の一書のように、ヤマタノヲロチ神話の前後の話として載せられてゐるのなせかを探りたい。

第四の一書、第五の一書の記述について考察する前に、ヤマタノヲロチ退治の神話がどのような歴史的な背景のもとに成立したのか、以前に他所で述べた事があるので取り上げておきたい(注1)。

スサノヲによるヤマタノヲロチ退治の神話は、記紀によれば以下のようなものである。

高天原を追放されたスサノヲは斐伊川の川上の鳥上という地に降り立った。すると、『日本書紀』本文によれば、泣き声があったので尋ねていったところ、少女を真中にして老夫婦が泣いていた。聞けばこの夫婦には八人の娘がいたが、毎年八つの頭を持つ大蛇であるヤマタノヲロチがやって来て、娘を吞まれました。今、クシイナダヒメを妻にもらうことを約泣いているのだという。そこでスサノヲは、老夫婦のアシナツチ・テナツチに、クシイナダヒメを妻にもらうことを約束させ、ヒメを簾に変えてみずらに差し、夫婦に酒を用意させて八つの棚を設け、それぞれに酒を置かせた。やって来たヤマタノヲロチがそれぞれ入れ物から酒を飲んで眠ってしまったので、スサノヲはこれを剣で斬り散らした。この時に剣の刃が欠けたので、尾を割いてみると中に剣(＝草薙の剣)があった。スサノヲはこの剣を天に献上し、出雲の須賀の地に宮殿を造つてクシイナダヒメと結婚したという。

私見によれば、この神話の原型とも言うべき伝承は、出雲ではなく、大和で発生したものである。なぜならばこの神話は出雲を舞台としてはいるが、スサノヲが活躍する場所はお出雲の中でもことに大和と関わりが深い場所であると思われるからである。また、『日本書紀』神代第八段第二の一書や『古語拾遺』には、ヤマタノヲロチを退治する時に使用した剣は、畿内の豪族である物部氏の代々奉じていた石上神宮に祀られていると記されている。実際に出雲への進出にも物部氏は深く関わりを持っていたと思われることから、この神話の原型の伝承は、もとは物部氏を持っていたものであると想定出来るのである。また、その伝承が出雲と結びついた背景には、物部氏が出雲へ進出して玉作の地へ赴くルートを掌握し、その後玉作の地が大和政権の支配下において忌部氏の管轄下に入ったという歴史的な事情が考えられる。神話の中でスサノヲが活躍する場所は、出雲の中でも殊に玉作の地と大和への奉納のルートに沿った地域に限られていると思われるからである。

それでは、この神話が現在見られるような形になったのはいつか。私は、この神話は大和の宮廷祭祀が整備されていく過程に並行してとのえられ、五世紀の後半頃から六世紀には現在見られるような形になった可能性があると思う。

五世紀という時期に注目したい。この時期は大和政権が各地に進出し、また各地で政治体制の変動が見られるとともに大和政権の宮廷機構が整えられた時期でもあった。

まずこの時期は、大和政権の先鋒となって物部氏が東国へ進出した時期にもあたる。たびたび他所で取り上げたことだが、石製模造品を検出する古墳時代中期の祭祀遺跡は大和政権の祭祀に結びつくものであり、言わば石製模造品の存在で大和政権の勢力の波及を示すことが出来るという(注2)。そしてまた、東国への進出に大きく貢献した物部氏が、その祭祀に深く関わっていたという。出雲の玉作遺跡からも石製模造品は出土している。出雲への畿内勢力の進出は古墳の様相などからもう少し早い時期であるかと思われるが、石製模造品が作られていたことから、この地に物部氏の影響が及んでいたことをうかがうことが出来る。

また雄略紀には、吉備による大和朝廷への反乱の記述が多く見られるが、門脇楨二氏によれば五世紀後葉には大和と吉備は対立と抗争の關係に入っていたという(注3)。このように、この時期には各地で政治的変動がみられ、そしてそれは宮廷機構の整備をうながすことにもなった。上田正昭氏は、雄略朝以降に后妃の出自に天皇の皇女が多くなってくることから、五世紀後半頃に后妃の機能が宮廷において固定化・身内化され、宮廷の祭祀機構が整えられていったと指摘されている(注4)。

ヤマトノヲロチ神話の成立には、こうした五世紀の事情がからんでいると思われるのである。

先述したように、この神話の中でササノヲが活躍する場所は、出雲の中でも殊に玉作の地と大和への奉納のルートに沿った地域に限られているように見える。このような、忌部氏の管轄下において玉を作り奉納するというその土地の性格は、ササノヲが獲得した草薙の剣を高天原へ献上してしまうという行為に結びついたと思われる。そしてその行為には、大嘗祭において忌部氏が天皇に鏡剣を献上することにもイメージが重なるのである。古代において、神宝の献上は服属した相手に祭祀権と統治権を献上することを意味しており、神宝の奉納と調達を職掌とする忌部氏が、大嘗祭において天皇に鏡剣を献上することには、臣下による服属の誓いを新たにすることを意味がこめられていたと考えられる。これらのことから、ササノヲが草薙の剣を高天原へ献上してしまうということは、高天原へ服属を誓うことを意味しているのであり、ササノヲによって地方の豪族の示すべき模範的な姿が描かれていることになるのである。

このような、神宝の献上と祭祀権・統治権の譲渡は、大和政権が各地に進出する中で、地方の首長との間にしばしば

繰り返された行為であると思われる。

これらのことから、ヤマタノヲロチ神話は五世紀半ばから後半にかけて起こった政治的変動や、それに伴う宮廷儀礼の整備を色濃く反映しながら成立したと思われるのである。

二 ヤマタノヲロチ神話と鍛冶文化

更に、ヤマタノヲロチ神話と物部氏を結びつける要因として、鉄文化との関わりの深さが挙げられる。スサノヲがヤマタノヲロチを剣によつて退治するこの神話が鉄文化と関わりが深いことは、多くの研究者によつて認められている(注5)。ただし、この神話が出雲の砂鉄精錬を背景に成立したと見ることは出来ないだろう。出雲の斐伊川流域は砂鉄の産地であるが、古代の大規模な製鉄遺跡が見つかっていないわけではない。また、この神話は五世紀頃の政治的な影響を受けながら成立したものと考えるが、鉄器の需要が高まっていたと思われるこの時期に、出雲の古墳では畿内から配布されたと思われる副葬品の質が低下し、量も減っているという(注6)。このように、この時期に畿内から見た出雲の重要性は低くなっていったと思われることから、決して出雲が重要な鉄の産地であったとは言えないのである。

この時期に鉄文化と関わりが深かったのはむしろ物部氏であつただろう。物部氏は先述したように、大和政権下において軍事を掌り、古墳時代中期には東国への進出にも貢献したと思われる。また、石上神宮の所在する奈良県天理市の布留遺跡の中には、五世紀前半から六世紀の、木器工房・鍛冶工房を併せ持った武器工房や、玉作の工房などが見られることから、物部氏はこの時期に鉄器生産とも深く関わりを持っていたと推測することが出来るのである(注7)。

更には言えば、物部氏は倭鍛冶に携わっていたと思われる。『先代旧事本紀』の天神本紀には、物部氏の祖神ニギハヤヒが河内国に天降った時従った者の中に「物部造等祖天津麻良」や「船子倭鍛師等祖天津真浦」という名が見える。綏靖天皇即位前紀には、「倭鍛部天津真浦」とあることから、アマツマラと言う名前は倭鍛冶に関わりの深い名前であると思われる。物部氏はとりわけ倭鍛冶に関わりを持っていたことがうかがえるのである。

倭鍛冶・韓鍛冶の違いについては、平野邦雄氏がすでに詳細な検討を加えられている。他所でも述べたが、後述する

五十猛命の検討にも関わるため改めて取り上げたい(注8)。平野氏によれば、五世紀初め頃より新羅系の馬具がもたらされ、また日本でも作られたと思われること、またこの頃は鉄製品の原料の鉄錠を朝鮮半島から輸入していたと思われること、中でも鉄錠はかつての新羅にあたる慶州の金冠塚から多く出土することなどから、倭鍛冶とは五世紀初め頃にもたらされた鑄銅・鑄鉄及び鍛冶を行う新羅の技術系統で、秦氏が関わっていたものであるという。これに対し韓鍛冶とは、その後五世紀後半より、百濟から新しく伝来した技術であり、鍛鉄及び砂鉄精錬を行うものであるという。

また、『古事記』には天の岩屋戸の条に「天安河の河上の天の堅石を取り、天の金山の鉄を取り、鍛人天津麻羅を求めて、伊斯許理度売命に科せて鏡を作らしめ」とある。アマツマラについては先述したので、イシコリドメを見ると、『日本書紀』神代第七段第一の一書に「故、即ち石凝姥を以て冶工として、天香山の金を採りて、日矛を作らしむ。又真名鹿の皮を全剥きて、天羽輔に作る。此を用て造り奉る神は、是即ち紀伊国に所坐す日前神なり」とある。また『古語拾遺』にも「是に、思兼神の議に従ひて、石凝姥神をして日の像の鏡を鑄しむ。初度に鑄たるは、少に意に合はず。(是紀伊国の日前神なり。)」とあり、鑄造に携わるものの名と思われる。このイシコリドメの記述について、平野氏はアマツマラと同様倭鍛冶に属すものとみなされ、「この日矛のモチーフが、新羅王子天日矛の渡来説話に用いられ、出石小刀や出石棒・日鏡などをもたらしたとされている。これらは、金銅の鑄冶を述べているのであり、韓鍛冶より古いことを印象づけてもいる」と述べられている。更に、『播磨国風土記』において天日矛の説話を有する地域が、秦氏の居住区と重複することを指摘されている。

ただし、平野氏の指摘された倭鍛冶・韓鍛冶の技法の導入の時期については、若干の異論がある。一つは鍛冶の技術は五世紀始めよりもずっと以前から朝鮮半島よりもたらされていたと思われることから、倭鍛冶の技術を一時期に限定することは出来ないのではないかということであり、もう一つは日本の製鉄が現段階においては六世紀後半頃までしか遡れないことである。

これらのことから、私は、倭鍛冶とは、韓鍛冶が輸入される以前の技術及びその技術を用いていた組織のことを意味し、海外からの技法を取り入れる過程で特に新羅と強い結び付きを持った時期があったと考える。また、古墳時代中期には、畿内において甲冑や馬具が製作されたが、先述したように、この時期は物部氏が大和政権のもと東国へ進出した時期にもあたり、石上神宮近くの布留遺跡には鍛冶工房などが見られた。このことと、『先代旧事本紀』でニギハヤヒに

従つて「船子倭鍛師等祖天津眞浦」というものが天降つたとされてゐることなどから、倭鍛冶には物部氏が深く携わつてゐたと推測出来るのである。そしてまた一方、百濟の技術系統である韓鍛冶は、『新撰姓氏録』に「紀辛槐臣」という名が見えることなどから、紀氏が携わつたものと考ええる(注9)。

ところで、『古事記』や『日本書紀』などの文献を見ると、倭鍛冶はまた、泉南から紀伊にかけての地と深い関わりを持つてゐたことがうかがえる。垂仁天皇案によれば、天皇の皇子イニシキは鳥取の河上宮、もしくは茅渚の菟砥川上宮で剣を一千口造つたという。またこれらの剣は石上神宮に納められ、イニシキは石上神宮の神宝を司つたという。

崇峻天皇即位前紀には、蘇我氏との戦いに敗れた物部守屋の「資人」であつた捕鳥部萬が、茅渚の有眞香村に逃げて、山中に隠れ、その地で壮絶に戦つて死んだことが記されており、泉南の地に物部氏に関わりを持つてゐたことをうかがうことが出来る。

更に、イシコリドメが倭鍛冶に関わるものであることは先述したが、イシコリドメの鑄造したとされる目矛や日の像の鏡は紀伊国の日前国懸神宮に祀られてゐるという。紀伊国は紀氏の本拠地だが、『先代旧事本紀』天孫本紀にはニギハヤヒの子孫建斗米命が紀伊国造智名曾の妹の中名草姫を妻としたと記されるなど、紀伊国と物部氏とのつながりも見出だされる。つまり、泉南から紀伊にかけてのこの地は、倭・韓を問わず鍛冶文化を受け入れる窓口となつたとも思われ、物部氏とも深い関係を持つてゐるように見えるのである。

ヤマタノヲロチ神話の原型伝承とも言うべきものが、倭鍛冶に携わつてゐた物部氏のものであつたと考えるならば、ここまで見てきたような、畿内の鍛冶文化のあり方についても考慮に入れなければならないだろう。先述したように韓鍛冶が砂鉄精錬を行う技術であるとするならば、それは少なくとも六世紀半ば以降のものになると思われる。そして一方、倭鍛冶の技法による鉄器生産が五世紀に盛んであつたとするならば、鉄文化の面から見ても、ヤマタノヲロチ神話はやはり五世紀の歴史的な事情に密接に関わつてゐると考えられるのである。

三 イタケルについて

これまでヤマタノヲロチ神話の成立についての私見を述べてきたが、ここで改めて『日本書紀』神代第八段第四の一

書と第五の一書に見られる五十猛命について考察したい。

五十猛命は、第四の一書に「即ち紀伊国に所坐す大神是なり」と記されており、和歌山県の伊太祁曾神社に祀られている。もともと紀伊国は木々の豊かな地であり、第八段の木種をまく話からも五十猛命が樹木生成の神であることがわかる。しかし、第四の一書第五の一書ともに朝鮮半島との関わりが述べられていること、先に見たように紀伊の地もまた倭鍛冶とのつながりが見られることなどから、五十猛命の話もまた、鍛冶文化との関わりを持ち、そのためにヤマタノヲロチ神話に並んで載録されたと言えるのではないだろうか。

五十猛命と鍛冶との関わりは、「イタテ神」からうかがうことが出来る。

「イタテ」の名を持つ神社の多くは五十猛命を祭神としており、五十猛命は「イタテ神」であるとも言われる。イタテ神についての記述は『播磨国風土記』饒磨郡の条に見られ、饒磨郡にある「因達の里」という土地の名がイタテ神にちなんでつけられたものであると記されている。

右、因達と称ふは、息長帯比売命、韓国を平けむと欲して、渡りましし時、御船前に御しし伊太代の神、此処に在す。故、神のみ名に因りて、里の名と為す。

このイタテ神が、鍛冶の神であったという指摘がある。

山本博氏は、イタテ神のことを「韓国から渡来した製鉄・鍛冶の技術神であった」と述べられ、肥後国玉名郡の江田船山古墳から出土した鉄製の直刀の「作刀者伊太口書者張安也」という銘文に注目され、類似の名を持つ製鉄関係者や神社名を挙げられている(注10)。ただし、播磨国の射楯兵主神社に注目された山本氏は、イタテの神社が出雲に多く、兵主神を祀る神社がアメノヒボコの勢力の中心である但馬国に多く見られることから、イタテ神をアシハラシコラ(＝オホナムチ)、兵主神をアメノヒボコとおきかえられている。また『播磨国風土記』にはアシハラシコラとアメノヒボコの国占めの争いの記述が幾つも見られるが、これは米作地と砂鉄の産地を争ったものであると述べられている。

これに対して真弓常忠氏は、出雲のイタテ神が全て「韓国」という名前を冠していることから、この神を出雲土着のオホナムチと置き換えることが妥当ではないとされている(注11)。真弓氏は、紀伊国では二社あるイタテの神社(伊太祁曾神社、伊達神社)が、いずれも名神大社となっていることから、紀氏が韓鍛冶を招来し、そうして渡来して来た韓鍛冶の奉祀した神がイタテ神(五十猛命)であったと述べられている。またこの神は、アメノヒボコによって象徴さ

れる三世紀代の製鉄文化の渡来に次いで、四世紀後半から五世紀代に渡来したとみなされている。一方、兵主神社ではオホナムチが祭神であることが多いことから、アメノヒボコと直ちに結びつけることは無理であるとされ、兵主神はもととは崑崙という中国の武神であり、百濟を経由して日本に入ってきたもので、早い時期に倭鍛冶のオホナムチと融合したという可能性を示唆されている。また、オホナムチ（大穴牟遲）の穴とは「鉄穴」を意味し、この神はもともと砂鉄精錬による産鉄の神であったと述べられている。

更に、真弓氏は美作国の中山神社を介して物部氏と鉄生産との関わりを述べられている。真弓氏によれば、中山神社はこの地方の製鉄関係者の信仰の中心であった。またこの神社には、「肩野物部乙磨」という者がもともとオホナムチを奉じていたが、これが中山神にとつてかわられたという縁起が伝えられている。『先代旧事本紀』天孫本紀には、物部尾與の子物部大市御狩御連の弟に物部臣竹連という名が見え、「肩野連 牟遲部連等祖」とされていることから、この人物が肩野物部乙磨に該当するという。これらのことから、美作でははじめ物部氏がオホナムチを奉じ、その地の製鉄集団を支配していたのだと述べられている。これに対し、アメノヒボコによつて象徴される新しい外来の鉄文化が渡来したことに、オホナムチとアメノヒボコが対立した経緯が『播磨国風土記』によつて表されており、国占めの争いは、オホナムチ（倭鍛冶）とアメノヒボコ（韓鍛冶）の新旧文化の軋轢、抗争を表したものであるとされた。

ここまで見たように、両氏はともにイタテ神を鍛冶神と結びつけられ、『播磨国風土記』の国占めの争いについてもその背景についてそれぞれ興味深い見解を示されている。ただし、山本氏のイタテアシハラシヨヲ、兵主アメノヒボコとする分類については、やはり真弓氏の指摘されるように出雲のイタテ神社がいずれも「韓国」という名を持つなど、朝鮮半島との関係の深さがうかがえることから、イタテ神を山本氏の言われるようにオホナムチと直ちに結びつけるわけにはいかないだろう。

更に、両氏とともに、日本において製鉄が行われた時期を大変早い段階に設定されている。真弓氏は原始的な露天たたらでの鉄の精錬が弥生時代から行われており、やがて砂鉄精錬の技法を習得して古墳時代に入ったと述べられている。しかし、先にも述べたように、砂鉄精錬の時期は現在の所六世紀後半までしか遡り得ない。仮にもう少し早い時期に国内で製鉄が行われていたとしても、真弓氏の指摘されるようにアメノヒボコの象徴する韓鍛冶が三世紀代に渡来したとするならば、砂鉄精錬はそれ以前から行われていたことになってしまう。そのように推測するのは困難ではないだ

るるか。また、中山神社は七〇七年創建とも伝えられており、氏の述べられるように物部肩野乙丸が物部尾輿の子とも推測されるならば、中山神社と物部氏が結びつけられたのは後世のことと思われる。従って倭鍛冶とは時代がかなり隔たっているように思える。

これらのことから私はやはり、先述したように、倭鍛冶・韓鍛冶は時を前後して渡来したものであり、砂鉄精練の技法は韓鍛冶として流入したと考えるのが自然であるように思う。そのように考えた時、アミノヒボコやイタテは朝鮮半島から渡来した技術集団を象徴するものではあつても、韓鍛冶であること一概に言うことは出来ない。むしろ先に挙げたように、五世紀に新羅系の馬具が作られたことや、鉄素材ともなった鉄鋌が新羅にあたる地から出土していることなどから、韓鍛冶以前の倭鍛冶と密接に結びついているのではないだろうか。

また『日本書紀』によれば、応神天皇二十一年に新羅の調使が泊まつた宿から火が出て武庫水門に集まつていた多くの船が焼けてしまった時、新羅の王が驚いて工匠を送つたとされ、それが猪名部の始祖であるという。雄略天皇十三年には「木工章那部眞根」という人物について記されていることから、「イナベ」は木工・造船に長けた技術者であると考えることが出来る。「イナベ」という名前は『先代旧事本紀』天神本紀にも見え、ニギハヤヒに従つて降臨した者の中に「為奈部等祖天津赤占」という名が見える。また同じくニギハヤヒに従つて降臨した船長及び梶取の中に、「船子倭鍛師等祖天津眞浦」等とともに「為奈部等祖天都赤星」という名が見える。これらのことは、物部氏が携わつていた倭鍛冶と新羅の技術とが結びついた時期があつたことを推測させるものである。

ここまで五十猛命は「イタテ」の神とも言われていることから、イタテ神の性格について考えてきた。このように、イタテ神が鍛冶神であり、とりわけ倭鍛冶を象徴する神であるならば、五十猛命もやはり、倭鍛冶に関わりが深い神であることみなすことが出来るのではないだろうか。

おわりに

『日本書紀』神代第八段第四の一書によれば、スサノヲと五十猛命ははじめ新羅に赴き、次いで埴土で船を作り日本へ渡つた。そして出雲国でスサノヲはヤマタノヲロチを退治し、五十猛命は木種を筑紫からはじめて国中に播き、すべ

て青山にしてしまったという。また第五の一書ではスサノヲは「韓郷の嶋には、是金銀有り。若使吾が児の所御す国に、浮宝有らずは、未だ佳からじ」と言つて自らの身体の毛を抜き、船や宮殿などを造るのに適した木々を生み出した。そして、子の五十猛命や大屋津姫、楓津姫がよく木種を播いたとされる。これらの異伝は造船に必要な木材のことを述べており、また朝鮮半島との強い結びつきが感じられる。本稿では、五十猛命が鍛冶神の性格を持ち、殊に倭鍛冶に関わりが深い神であると思われることを述べてきた。その五十猛命が、『日本書紀』神代第八段においてスサノヲとともに造船や木材の生成に関わり、とりわけ新羅に赴いていることは、物部氏が新羅と結び付きを持つ倭鍛冶に携わり、「イナベ」のような渡来の造船及び木工技術者とも関わりを持つていたことの反映とみなせるのではないだろうか(注12)。

五十猛命はまた、紀伊国の大神であるが、先にも見たように紀伊の地は渡来の鍛冶文化を受け入れる窓口となつたとも思われ、倭鍛冶とも関わりが深い土地である。このように、『日本書紀』において五十猛命の話がヤマトノヲロチ神話に並び載録されているのは、これらの神話とともに、倭鍛冶との密接な関わりの中で成立したからであり、倭鍛冶が特に盛んであつたと考えられる古墳時代中期の様相を良く表していると思われるのである。

注

本論における引用は、岩波日本古典文学大系新装版『日本書紀』、岩波日本古典文学大系新装版『風土記』、新訂増補国史大系『先代旧事本紀』に拠る。なお、旧字体は新字体に改めた。

- (1) 拙稿Ⅰ「ヤマトノヲロチ神話の形成」『学習院大学上代文学研究 第二十六号』二〇〇一年三月、拙稿Ⅱ「劍による国土平定の伝承と物部氏」『古代中世文学論考 第十二集』新典社、二〇〇四年五月
- (2) 寺村光晴氏『古代玉作形成史の研究』吉川弘文館一九八〇年十二月一九一頁〜二七二頁、三六五頁〜四三五頁
- (3) 門脇楨二氏『吉備の古代史』NHKブックス一九九二年八月七四頁〜一〇五頁
- (4) 上田正昭氏『日本古代国家論究』塙書房一九六八年十一月二二頁〜二六頁
- (5) 西郷信綱氏『古事記の世界』岩波新書一九六七年九月七四頁〜七五頁、大林太良氏『日本神話の起源』角川書店一九六一年七月一六四頁〜一九五頁、松前健氏『日本神話の形成』塙書房一九七〇年五月一八一頁〜一九九

頁

- (6) 池淵俊一氏「方墳の世界」島根県教育委員会・朝日新聞社編集『古代出雲文化展―神々の国 悠久の遺産―』一九九七年四月九二頁〜九三頁
- (7) 花田勝広氏『古代の鉄生産と渡来人―倭政権の形成と生産組織―』雄山閣二〇〇二年九月五一頁〜六一頁
- (8) 平野邦雄氏『大化前代社会組織の研究』吉川弘文館一九六九年五月一六二頁〜一七四頁(倭鍛冶・韓鍛冶については村山前傾稿(1) II三三頁〜三九頁において取り上げた。)
- (9) 紀氏が韓鍛冶に携わっていたことは岸俊男氏や黛弘道氏によつてすでに検討されている。(岸氏『日本古代政治史研究』塙書房一九六六年五月一三二頁〜一三三頁、黛氏『古代の航海―天孫本紀の一考察―』『東アジアの古代文化』五〇大和書房一九八一年)村山前傾稿(1) IIに記載
- (10) 山本博氏『古代の製鉄』学生社一九七五年九月一〇〇頁〜一三九頁
- (11) 真司常忠氏『日本古代祭祀と鉄』学生社一九八一年十二月一四七頁〜一六九頁、一七五頁〜一八一頁、『古代の鉄と神々』学生社一九九七年十月三三頁〜四五頁、一〇九頁〜一三六頁
- (12) 黛弘道氏は、黛氏前傾稿(9)において、造船と鍛冶屋は無縁ではなく、船舶の建造や航行中の修理のために鍛冶屋が必要であったことを指摘されている。